



波乱万丈の人生を超越した俳人 小林一茶（1763—1828）

古代から存在した歌謡

年代不詳ですが、日本最古の歌謡は素戔嗚尊による

八雲立つ 出雲八重垣 妻籠みに 八重垣作る その八重垣を

とされています。このような歌謡が古代の日本に広範に普及していたことは、八世紀後半に編纂された『万葉集』に、高貴な人々から一般の庶民まで多様な国民による七世紀前半からの四五〇〇以上の歌謡が収集されていることが証明しています。これらは中国伝来の「漢詩」に対比して「和歌」と命名されていました。

七世紀から九世紀にかけて遣隋使や遣唐使が中国に派遣されていた時代は、上流社会では漢詩が流行していましたが、使節の派遣が中止となった一〇世紀以後になると和歌が復活します。それらは五音と七音を何度も繰返して最後に七音で終了する仕組みで、全体は「連歌」と名付けられました。その最初の五音七音五音は「発句」とか「俳諧」という名前で独立するようになり、明治時代に正岡子規により「俳句」と命名されました。

江戸時代になり「俳諧」が流行しはじめ、庶民の関心の対象になります。一七世紀中期の寛永・元禄時代には西山宗因や松尾芭蕉が、一八世紀後半の文化・文政時代には与謝蕪村や小林一茶が登場します。宗因の父親は加藤清正の家臣、芭蕉の父親は苗字帯刀を許可された土豪である一方、蕪村は母親が奉公した商家の主人の子供、一茶は信濃の農家の子供というように、江戸時代後半になって俳諧が上流社会から一般社会に浸透してきました。

北国街道の柏原に誕生

今回は江戸時代後期に活躍した俳人小林一茶を紹介します。江戸幕府が整備した北国街道は信濃国追分宿で中山道と分離し、信濃国善光寺を経由して越後国高田城までを連絡する重要な街道ですが、善光寺から北側に二五キロメートルの越後との国境の手前に柏原宿（現在の長野県信濃町）があります。農村であるとともに、江戸と北陸を連絡する交通の要衝であり、物資の中継基地であるとともに江戸の文化も流入してきた土地でした。

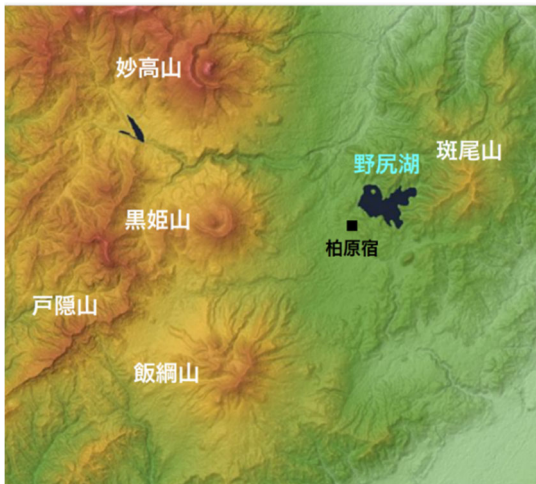


図1 北信五岳

標高約七〇〇メートルの高地にあり、東側の背後にはナウマンゾウの化石が出土したことで有名な野尻湖がある一方、西方には北信五岳（図1）のうち妙高戸隠連山国立公園に位置する妙高山（二四五四メートル）、黒姫山（二〇五三メートル）、飯綱山（一九一七メートル）の三山を眺望できる風光明媚な土地ですが、豪雪地帯でもあります。一茶の晩年の

これがまあ ついの栖か 雪五尺

という俳句が地域の特徴を端的に表現しています。

この農村の百姓で当時三一歳の小林弥五兵衛と二〇代の「くに」の長男として一七六三年に誕生したのが一茶となる弥太郎でした。父親は農業をするとともに駄馬によって街道で荷物を運搬する仕事もしており、それなりの収入のある農家でした。しかし弥太郎が三歳になったときに母親が死亡し、祖母の「かな」により養育されましたが、弥太郎が八歳になったときに父親が「さつ」という女性と再婚し、仙六という子供が誕生します。

そして弥太郎が一四歳になった一七七六年に可愛がってくれていた祖母が死亡し、継母との関係は微妙になっていきます。しかし、四石程度の収穫しかない農家といえ

ども田植や刈入の時期は人手が必要で、弥太郎は仙六を背負って仕事を手伝っていました。宿場の本陣の中村六左衛門が子供に教育をしていたため、勉強をすることはできました。五〇歳代になって、その時代を回顧した

継ツ子が 手習をする 木葉哉

という俳句が記録されています。

江戸に奉公し俳句に目覚める

しかし、祖母の没後は継母との関係が悪化していく一方であったため、弥太郎が一五歳になった一七七七年、父親は江戸へ奉公させることにしました。継母と別々に生活すれば関係が修復するかもしれないという父親の思惑からと想像されます。江戸での生活の詳細は不明ですが、信濃の田舎とは桁違いの巨大都市での奉公は大変に過酷な生活で、父親の思惑とは反対に継母への憎悪は増加する一方で、晩年の文集にも気持ちを記載しています。

このような苦労ばかりの生活から息抜きのために見出したのが俳諧でした。弥太郎が下総国馬橋（現在の千葉県松戸市）にある大川立砂が主人である商家に奉公していたとき、その立砂が俳人でもあったため、俳諧に興味をもつようになりました。そして二五歳になった一七八七年に俳諧で生活していくことを決意し、当時、江戸の東部で隆盛であった葛飾派の宗匠の二六庵竹阿の弟子となり、俳号も菊明と名乗るようになります。

やがて菊明は句会の進行をする執筆に抜擢されるようになります。この役目は俳句に登場する故事などの知識があり、礼儀作法にも見識がある人物が担当するのですが、そのような能力があったと推察されます。当時は九〇年前の芭蕉の『奥の細道』の行脚が有名になっており、多数の俳人が芭蕉の足跡を確認しながら東北から北陸を旅行していました。菊明も二七歳の一七八九年に東北地方を行脚し、象潟、松島、恐山などの名所を訪問しています。

この旅行から二年が経過した一七九一年に菊明は一茶を名乗るようになったと推定されていますが、翌年三月、父親の病気を理由に一旦帰郷します。江戸に移動してから一五年が経過し、二九歳になっていました。ここで父親には俳人を職業として生活し、そのため西国を行脚する計画があることを説明し江戸に帰還します。そして翌年、言葉のように西国行脚に出発しますが、下総、浦賀、伊東、遠江などの友人を訪問してから京都を目指しました。

京都では父親に依頼された西本願寺へ代参し、大阪、河内を経由して四国に渡航、自分の俳句の師匠の弟子が生活している讃岐観音寺を拠点とし、四国の各地を巡回し

てから九州に移動し、翌年の一七九三年に九州各地を旅行、九四年には再度、四国各地を巡回し、出発してから六年が経過した九八年に江戸へ帰還しました。これが容易な旅行ではなかったことは

秋の夜や 旅の男の 針仕事

という俳句が表現しています。

全国でも著名な俳人となる

六年の行脚から江戸へ帰還した翌年の一七九九年、江戸で世話になった大川立砂が急死してしまいます。そのような時期に今度は柏原の父親が病気になったという情報があり、一八〇一年三月に帰郷しますが、六月に父親は死亡してしまいます。その間に一茶と仙六に財産を二分するように伝達しますが、仙六と母親は一茶が不在の二四年間に石高を三倍にも増加させていましたから、二人には納得できる内容ではなく、争議の原因になりました。

しかし、父親が死亡した時期には、江戸で一流の俳人になりたいという野心があり、帰郷する気持ちはありませんでした。実際、一茶は『万葉集』『古今和歌集』などの歌集、『古事記』『続日本紀』などの史書、『源氏物語』『土佐日記』などの文学、さらには中国の『詩経』『易経』などの古典を熱心に勉強するとともに、優秀な俳人との交流を句作に反映させ、「一茶調」という独自の俳風を創造していきます。この勉強熱心は生涯継続しています。

その結果、一茶は有名な俳人になっていきます。江戸時代には様々な分野で大相撲番付表のような順位が発表されており、一八一一年の「正風俳諧名家角力組」という番付で、一茶は江戸の俳人として東方の前頭五枚目に記載されています。全国で一七六名が掲載されているうちの東方の八位ですから相当の評価でした。ただし、上位の俳人は多数の弟子もいて生活に苦労することはありませんが、一茶はそれでもありませんでした。

そのような経済事情と次第に進行する老化の影響で一茶は帰郷を検討するようになります。一八〇七年に父親の七回忌の法要のために帰郷したとき、父親の死亡の間際の遺言を根拠に継母や仙六と財産分与の相談をしますが、三〇年間も故郷を留守にしたまま、母子が苦労して拡大してきた財産の分与という要求は故郷の村人からも非難されます。

人誹る 会が立つなり 冬籠

結果として最終決着には六年の歳月が必要でした。

財産が分与されても農業で生活を維持するには高齢になりすぎているため、一茶は生活の基盤となる俳諧結社を設立し、師匠となる段取りを開始します。その時期には、信濃でも俳句が隆盛になっており、すでに何社かが存在していました。一茶は各地の俳句を愛好する人々と出会い一茶社中を結成します。前述の番付でも想像できるように、すでに一茶は日本を代表する俳人と評価されており、各地から人々が訪問してくるほど繁盛しました。

柏原に帰郷し三度の結婚をする

遺産相続問題も解決し、俳諧結社も順調に進展したことも影響し、一茶は五二歳になった一八一四年に野尻宿の有力な農家の菊という二八歳の女性と結婚します。三男一女が誕生しますが、すべて夭折してしまっています。

露の世は 露の世ながら さりながら

さらに二〇年には本人も雪道で転倒して中風となり、歩行も困難になりますし、菊も痛風となって二三年に三七歳で死亡してしまっています。九年の結婚生活でした。

小言いう 相手もあらば けふの月

すでに一茶は六〇歳になっていましたが再婚を希望し、飯山藩士の田中義条の三八歳の娘で離婚して出戻っていた雪と結婚します。しかし、俳人として有名になっていた一茶は北信一帯の門人を訪問して自宅を留守にしがちであったため、数ヶ月後には離婚ということになります。

淋しさに 飯をくふ也 秋の風

ところが、ある事情から三度目の結婚をすることになります。柏原の旅館に奉公していた「やを」という女性に私生児が誕生して問題となり、その解決として身寄りのない一茶と結婚することになったのです。



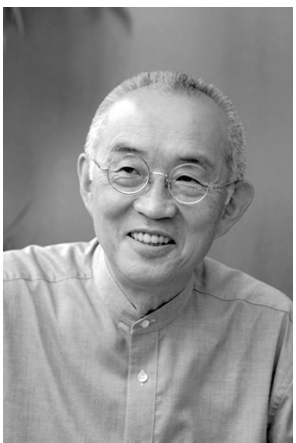
図2 一茶終焉の土蔵

伴侶と跡継ぎができた六五歳の一茶にも平穏な晩年が到来したようだったが、さらなる災難が襲来します。一八二七年初夏に柏原の集落の八割が焼滅する大火が発生したのです。幸運にも一茶の所有する土蔵は無事で、そこに仮住まいをします(図2)。中風で歩行も困難でしたが、一茶は各地の門人を訪問し、初冬に柏原に帰還しますが、一日後に死亡しました。六五歳でした。遺骨は宿場にある菩提寺の明専寺の墓地に埋葬されました(図3)。



図3 小林家墓(名専寺)

急死であり、辞世の俳句もありませんでしたが、意外な遺産がありました。「やを」が身籠っており、翌年四月に女兒「やた」が誕生したのです。成長した「やた」は越後高田の農家の丸山卯吉を入婿とし、一茶が念願した一家の存続は達成されました。江戸の三大俳人の芭蕉は生涯に九六七句、蕪村は二九一八句を記録していますが、一茶は二万一二〇〇句という桁違いの句数を記録しています。人生でも句作でも多産の巨匠でした。



つきお よしお 1942年名古屋生まれ。1965年東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大学教授、東京大学教授などを経て東京大学名誉教授。2002、03年総務省総務審議官。これまでコンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策などを研究。全国各地でカヌーとクロスカントリーをしながら、知床半島塾、羊蹄山麓塾、釧路湿原塾、白馬仰山塾、宮川清流塾、瀬戸内海塾などを主催し、地域の有志とともに環境保護や地域計画に取り組み。主要著書に『日本 百年の転換

『戦略』（講談社）、『縮小文明の展望』（東京大学出版会）、『地球共生』（講談社）、『地球の救い方』、『水の話』（遊行社）、『100年先を読む』（モラロジー研究所）、『先住民族の叢智』（遊行社）、『誰も言わなかった！本当は怖いビッグデータとサイバー戦争のカラクリ』（アスコム）、『日本が世界地図から消滅しないための戦略』（致知出版社）、『幸福実感社会への転進』（モラロジー研究所）、『転換日本 地域創成の展望』（東京大学出版会）など。最新刊は『凜凜たる人生』（遊行社）。